

## 地方だより

### 気象庁天気相談所

天気相談所は昭和21年2月25日の誕生だから、今年で13年目ということになる。天気相談とか予報の問合わせを一手にひきうけている気象庁の窓口である。

天気相談所というお役所らしくない名前のついている所がなんとなく時勢にあっていてよい。聞くところによると、この名付親は和達長官だそうで、それも戦後いちはやく考えついたので敬服するほかない。

八百万都民を相手の商売だから仕事は実にいそがしい。直接相談にくる人も多いが、なんといっても電話による天気予報の問合わせが圧倒的に多い。天気の話だから電話で簡単に用を足そうというわけであろう。

運わるく？土曜日曜の前の金曜日に雨でも降ると、電話は気がいのように鳴りつづく。朝から晩まであまり変りばえのしないことをくり返すのだから大い気がどうかしてしまう。馴れないうちは受話器をあてた方の耳がそっくり返ってしまったような気がして耳をもとへもどそうとひっぱってみたりすることもある。耳の奥も痛くなる。興奮しているから家に帰っても本を読むのもおっくうだし、ろくろく眠れないこともある。それほどすさまじい。もちろん昼休みなどできない。

夏の登山シーズンなどは、曜日におかまいなく毎日々々朝から晩まで電話は鳴りっぱなしである。恐らく測候所の方々もおなじ御苦労と拝察するが、東京の場合は特にひどいかも知れない。

朝9時から退庁の17時まで8時間を手ぎわよく1人1分間をかたずけたとしても僅かに480人にしか答えられない。手数のかかる割に能率が上らない。もちろん昼食もとらねばならないから本当に話のできる数はさらに下廻るはずである。かけてくる人は一生懸命で、指が痛くなりながら3時間でも4時間でもダイヤルをまわしつづける交換嬢をシタゲキレイしながら電話を通じさせようとする。電話予報222ができてこの状況は変わらず、最近では222にかける数がむしろ少なくなりつつあるという。最近では新聞の天気図を見ながら電話してくる人もポツポツあらわれはじめた。そういう人を相手のときは



話がしやすいのだが、まだまだ『まるでお天気教の教祖にご託宣をうかがいにくるみたい(日経紙)』な人も多い。そういう人々はおおむねこちらをトーキング・マシンに見立てて、天気通報をさせようとするから、相談どころではなくなる。ヒヤカシはほとんどないが、怒られることはある。

それはともかくとして相談所の主要な仕事の一つは報道機関との密接な連係である。新聞・ラジオを通じて気象庁のPR、気象知識の向上をめざしているわけである。

最近では天気記事のしめるスペースが非常に大きくなった。新聞天気図も改良をかさねている。相談所では東京の朝日、毎日、読売をはじめ日経、産経、東京の各紙の天気記事をスクラップしている。それによると年間およそ3,000から4,000件にもなる。もちろん重複したものは除いてあるから実際には見逃したものを含めるとさらに多くなるだろう。このほかNHKや多くの民放もあるわけだから、それらを含めればおそらくこの5割増くらいと考えても多すぎることはあるまい。

昭和29年秋には長期懸案の記者クラブもできた。室内には各社の専用電話も備わっている。また記者には年には数回集合ねがって気象や地震などのレクチャーも行っている。目的は意志の疎通をはかるのがねらいで、取材上参考になることや電子計算機など最近の話題をテーマにすることが多い。講師は大体予報官や担当係官にお願いしている。いそがしい天気相談所も冬はさすがに暇となる。暖冬でないかぎりスキーヤー、スケーターたちがおちつくからである。